

## 学校的秩序を問い直す

京生研基調委員会

### 1 はじめに

昨年度の京生研基調提案では、分析と方針をもって実践を進めていくことの大切さを述べた。とくに、分析では、子どもの行動の背景にある願いや成育歴の中で刻まれてきた生きづらさを読み解いていき、方針を出していくことの重要性を強調した。今年度の基調提案では、集団づくりを行っていくときに、最も大きな課題を抱えた子どもとの信頼関係をつくっていくためには、学校的秩序にとらわれてはいけないということ、そして、そこからどのようにすれば解放できるのかを実践記録を基に述べたい。そのためには、無意識に私たちの学校現場に浸透してきている学校的秩序や学校的価値観を視覚化して、その正体を暴く必要がある。束縛された学校を解放するために、子どもの声を消そうとしている学校を変革し、子どもの声に基づく学校をつくるために、何が必要なのかを考えていきたい。

### 2 教育情勢

2024 年 2 月に京都市の市長選挙が行われた。与党などが推薦する候補者が当選する結果になった。ここで注目すべきは、投票率の低さであった。4 年前の選挙に比べるとわずかに投票率は上がったものの有権者の 4 割程度にしか伸びなかった。半分以上の市民は投票に行かなかったのだ。これは何を意味しているのだろうか？ 政治への無関心と言われて久しいが、無関心というより政治へのあきらめが投票率の低さに表われているのではないか。

直近の世論調査をみると、岸田内閣の支持率は 2 割を切るまでにさがっている<sup>1</sup>。また、経済対策の目玉である定額減税（1 人当たり 4 万円）については物価高対策として効果があると思うかについては「ない」が 65.3%で、「ある」は 14.2%に留まっている。政治資金規正法改正案については「あまり評価しない」が 33.0%、「まったく評価しない」が 39.2%で、7 割超が否定的となっており、自民党派閥の政治資金パーティー問題が国民の政治不信に拍車をかけている。この問題については、内閣は徹底して調査していく姿勢はなく、「記憶にない」等という答弁でその場をごまかし通そうとしている。既得権益にいつまでもしがみついている政治が、政治の腐敗を招いていると考える。これでは、市民の声は政治にいつにも届かない。市民は政治に対して、怒りをもち始めている。

教育情勢に関しても同じことが言える。とくに、「先生が足りない」問題は解消するどころかどんどんと進み、深刻化している。4 月からすでに教員の未配置があるままスタートしている学校が現れた。教員の未配置は年度が進むほど拡大する傾向があり、2023 年度は小中高支援学校の 82 校で教員の未配置があることが分かった<sup>2</sup>。行政はこういった問題に、向き合おうとしない。「先生が足りない」問題の小手先の解決策として行政が持ち出してきたのが、「チーム担任制」である。京都市内の小学校では「チーム担任制」が 21 校で導入された<sup>3</sup>。特定のクラスに担任を固定せず、複数の教職員で担任業務を担っていくシステムである。複数の目で子どもたちを重層的に見て、関わる大人を増やすということは、聞こえがいいかもしれないが、その実態は、先生が足りない学校に非常勤講師を多く採用して何とか人員を確保しようとするものである。「チーム担任制」を行っている学校からは、過重労働の声があがっている。また、担任が変わっていくことで、教職員

が子どもと信頼関係をつくりにくいという問題も浮上している。本来の「チーム担任制」の成果が発揮されるためには、教職員がしっかりと配置され、職員同士でコミュニケーションをとることができる時間が確保される必要があり、条件が整ってこそ成り立っていくものである。

全国の不登校数が22年度299,048人で前年度より22.1%増と高い増加率となっている<sup>4</sup>。増加理由については多岐に及ぶが、教職員不足により、教職員が子どもにじっくりと寄り添う時間がとれないことも問題の一つだと考えることができる。教職員不足が常態化される学校現場において、児童生徒に対する丁寧な対応には限界が来ている。そのために、教職員は学校に登校して来る子どもたちの対応で疲れ果て、不登校の子どもたちの対応は後回しになっている。

新自由主義とはまさに競争と排除の理論からできているものであり、社会全体がぎすぎすした関係になっている。そういった傾向は、学校でも見られる。ゼロトレランス（寛容なき指導）、スタンダードといったかっちりした体制に学校はとらわれている。そして、「学力」が上がれば良い学校になるという神話にしがみついている。「学力」向上を目指して学校全体が走り出しているが、それはゴールのない競争であり、永遠に走り続けなければならない。そして、そこから脱落する子どもたちには「不登校」という名称を、脱落する教師には「不適格教員」という名称を与えて、学校から排除しているのが現状ではないだろうか。

ゼロトレランスやスタンダードが支配する学校では、規則を守るか守らないかが大切であって、その子の思いはまったく無視されているということある。そして、教師の思い通りに子どもをコントロールすることで管理的な傾向が強化されているのである。学校的秩序に支配された指導では、教師は管理的な方向に惹かれていってしまう。規則を守らなかった時に、規則を柔軟なものとして捉えずにカチツとした強固なものとして捉えている学校的秩序では、規則を守れなかった子どもに、その理由の有無を問わずに自己責任を押し付けていくのだ。

小中連携や小中一貫の指導が強調される昨今であるが、こんなケースが実際にあった。茶髪であった小学校6年生の子どもに対して、入学先の中学校の教師が何度も小学校に電話してきた。内容は、「中学校の入学式までに髪の毛を黒くするように保護者に言ってください」というものであった。6年生の担任は、保護者に連絡をした。1週間後にまた中学校から「きちんと黒に戻したかどうか」の連絡が来た。戻していない状況を伝えると、中学校教師は、「それでは困る。入学式の時に全員が黒になっていないとそこから、すべて乱れていきます。一人でもそういう子どもがいると規則が乱れていくのでなんとかして直させてください」という返答をしてきた。6年生の担任は怒りすら覚えたという。

このように学校的価値にとらわれた指導は、子どもの背景にあるさまざまな思いを抹殺して、表に見える現象のみを指導の対象としていく。規則に柔軟性をもたせない指導、規則というきちつとしたものを愛好する指導というのは、子どもたちを管理的な方向へと導くことになる。と同時に、学校的価値に従順に従うことを強要して、そこからはみ出る子どもに対しては、自己責任としての烙印を押しつけて排除していってしまう。それは子どもだけでなく、教師や保護者をも排除の対象としてくる。最初は排除する時には、多少の罪悪感や自分の無力感を感じることもあるが、ここまで学校的秩序に固まってしまうと、その罪悪感を感じる必要性はないのだ。教師が何とかする問題ではないのだという思いをもたせてしまう。学校的秩序が、教師をより一層管理的な指導を強化していく。そのもとで指導を受けている子どもは否応なしに自分や他者を管理的なまなざしで見ることになっていく。競争と秩序、自己責任がより一層、強化されていく。

だからこそ、この情勢を切り拓いていくためには、学校的価値を批判的に見て、自治的な指導、

子どもの声に耳を傾ける指導が必要になってくるのではないかと考える。では、どのような指導や子どもへの見方をしていけば良いのか2つのレポートから学んでいく。

### 3 子どもの困りに寄り添い、子どもと共に歩み始めた教師

では、どのような指導や子どもへの見方をしていけば良いのか2つの実践記録から学んでいく。まずは、高原夏希実践<sup>5</sup>を読み解いていく。高原は、6年生の担任になり、カナという女の子を担当することになる。カナは、小学校4年生から保健室に通うようになり、集団の中で過ごすことの不安や悩みを抱えることになる。新年度のクラス編成を知ってカナは「クラス替え、神やった」と同級生の存在を喜び、さらに高原が担任だと知って「担任の先生も神やった」という出会いをする（保健室の先生に伝えた言葉）。学習が苦手なカナに対しては、カナが「わからない」と言うたびに高原は机の横について授業を進めていった。カナがクラスでテストを受けたくない時には、隣の空き教室に行き問題文を読み上げながら一緒にテストに取り組んでいる。こういったテストのやりとりを管理職や母とも合意の上で進めていっている。カナの困りに共感する他者として高原は登場している。高原がカナにとって決定的に共感的他者としての存在となったのは、6月末の失踪事件の時であろう。カナが「かえります」という手紙を友達に渡して許可なく帰ろうとした。高原は、保健室や校門付近を必死で走り回って探した。そして、ランドセルを背負って座っているカナを見つけ、そばに行った。レポートにはこう書かれている。

ほっとして近づくと、カナは泣いていた。それが見えた瞬間、私も泣きだしてしまった。「あんた、どうしたんよ…帰りたくなるほどって…どんだけつらいことがあったんよ…」「めっちゃ心配した…」と泣きながら肩を抱いた。（中略）そうなるのって、2種類あると思うねん。何かきっかけがあって一気にしんどくなることもあるし、きっかけとかはないけど、ちょっとずついろんなしんどさが重なってきて限界超えちゃうこともあると思うねん。今日のことは、どっち？」

高原はカナが見つかった安堵と帰りたくなるほどつらかったカナの気持ちに共感して涙を流している。教師はともすれば勝手に帰ったことを否定して、それ以外の選択肢を探すように指導しがちであるが、高原はそうではない。そうせざるを得なかったカナのしんどさにギョッと共感しているからこそ、涙が出たし「どんだけつらいことがあったんよ」という言葉が出たのであろう。

カナが疲れて保健室登校や休みが増えた時には、母に対して「今は休むことも、遠くまで泳ぐための息継ぎだと思って、前向きにとらえよう」と話している。カナの生命の中の息吹をずっと信じて待っている方針が感じられる。こういった方針は、高原だけではなくカナを取り巻く子たちにも広がっていつている。高原はカナを取り巻く子らへ「どうしたら、今よりカナが学校に来やすくなると思う？」と聞いて、修学旅行に向けてカナの心の支えになるメンバーをつくらうとした。ある時、見た目は明るく元気に振る舞っているカナを見て、ライトが「元気やん、行けるやろ」と言った。カナはこの言葉を聞いてつらくなる。この時に、高原はカナの心の葛藤をクラスに開いている。

「みんなから見たら、カナはそんなにしんどそうには見えへんと思う。もしかしたら、元気やのになんで休んでるん。さぼってるんちゃうんって見えることもあるかもしれへん。（中略）一番近くにいるこの27人だけはカナのこと分かって欲しい。『ちがうで。ほんまは無理して頑張ってい

るんやで』って。『そう見えてるだけ。そう見せてるだけなんや』って」

高原は、まずはカナの困りに寄り添い、カナと共に歩み始めた。そこにはカナの困りを自分のこととして受け止めて何とかしたいという強い思いがある。カナ一人ではカナの困りを乗り越えていくのは難しい。カナの苦しみに共感できたからこそ、共感的他者としてカナの前に居続けることができたのであろう。子どもの苦しみ、困りを自分のこととして共感して、それを一緒に乗り越えていく他者として教師が登場していくこと、そして、その苦しみと困りを理解し、一緒に乗り越えていく仲間を増やしていくことが大切になってくる。

#### 4 行動の裏にある本当の願いや彼の困りに共感する

続いて、秦和範の実践<sup>6</sup>を読み解いていこう。秦は、小学校 3 年生の担任として翼を受け持つ。翼は、幼少期から母の虐待を受け、十分に愛着を形成できないまま育ってきた。小学校 1 年生からケンカやトラブルを繰り返して、毎日、家庭への連絡があったという。母は、学校への不信をもったまま秦と出会う。そこで、秦は、翼の行動の裏にある本当の願いや彼の困りに共感していきながらトラブルを解決していく。

そんなある時、翼は秦に「おれ、イライラするとなかなか落ち着けない」と言う。秦はこの言葉を翼の自己責任として扱わずに、翼の苦悩として受け止めた。そして、クラスのみんなでこの悩みを話し合うことにした。冒頭で秦は、「みんなにも苦手なことがあるように翼には、イライラするとなかなか落ち着かずに暴言や暴力をふるってしまうということが苦手な部分であり、それは多少なりともみんなの中にある。みんなはイライラしたときにどのようにして沈めていつているのだろうか？」と語る。みんなは、翼の悩みを共感的に受け止めて、どうしていったらいいのかを一緒に考えていった。

クラスの子どもたちは決して、翼の暴言や暴力を自己責任（おまえが悪い）とせず、翼の困り、苦手なこととして受け止める。それを乗り越えていこうとする翼を応援していく雰囲気をつくりだしていった。そういう体験をくぐりぬけた翼はこの後、ドッチボールのもめ事でイライラしたときに、その場を離れて一人になり、落ち着かせることができた。また、リコーダーが苦手な友だちがリコーダーのテストに受からずに落ち込んでいる時には、翼は自ら友だちの隣りに行き背中をさすって励ましていた。それだけではなく、リコーダーの指使いを翼は教えていた。翼は、自分の困りを一緒に考えてくれた仲間は今度は自分ができることをして仲間を助けようとすることができた。ここにクラスの連帯が生まれた。

その後、秦は翼が抱える家庭での困りを相談できる仲間をつくる。翼が暴言や暴力を繰り返す日々が続いた。そこで秦は、これは家庭での困りごとがあったのではないかと分析して、翼に聞いた。すると、母からの虐待があったことが分かった。そのイライラがおさまらずに翼は不安定な日々を過ごしていた。イライラを自分で沈める方法が必要と考えた秦は、このイライラの原因を仲間に語ることで可能になるのではないかと考え、このことを語っても良い仲間を翼から聞き出す。3 名の仲間の名前が出てきた。そこで、早速放課後に、この仲間と翼の困りを分かち合う。秦は、つらい思いをしてもがんばって学校に来ている翼を励ます仲間を作り出していった。

このように、子どもの抱える生きづらさをクラス集団にひらき、みんなと共有することが重要である。そして、子どもと教師が、子どもの願いや要求を封じ込めてしまう学校的秩序を、問い直していく体験や時間を過ごすことにより、集団は前進していくと考えられる。人間は誰もが、

生きづらさや弱さを抱えている。でも、「それでいいんだ」と、受け止め合い、助け合える集団を作っていくことで、学校的秩序から子どもと教師自らが解放されていくのだ。そういう集団づくりが今、求められている。

## 5 母との関係のつくり直し

秦は、翼の母に関しては、週に1回学校の様子を語るということと、翼の良さを母と共有すること、さらに母の困りを共感的に聞いて励ますという方針をもって実践を取り組んでいった。しかし、2学期後半まで母からの翼への虐待はなくならなかった。もう一度、母への方針を立て直すことをサークルで指摘された秦は、翼の母が暴力を振るってしまう気持ちに共感的に関わりながら、子育ては完ぺきにできなくて当然であり、時には可愛く思うが時には憎しみを覚えるということもあることを伝える。さらに、翼は、ときに勝ち負けにこだわりイライラしてしまうことはあるが、翼への指導には決して暴力を振るう必要性がないことを母に伝えていく。また、母の虐待が減ることで、学校でも落ち着いて過ごせていることを伝えていく。

すると、3学期に入ってから、母は「キレて暴力を振ることはなくなりました」と秦に話すようになった。ここでも母の子育ての困りを共感的に聞き出して、約束を守らなかったらゲームの時間を減らすとか、テレビの時間を制限するとか、暴力以外の方法を一緒に母と考えていった秦の姿勢が、結果的には母の暴力を減らして、翼の安心にもつながっていったのであろう。3学期には母の教師や学校への不信も小さくなっていき、参観に来られて、懇談会にも残るようになった。1学期当初は、ほぼ毎日トラブルを起こして暴言や暴力を繰り返して翼も、3学期からは週に1～2回程度に減り、友だちにやさしくする場面が増えてきた。秦は、母の困りを共感的に受け止めて、一緒に子育ての悩みを乗り越えるという方針をもって実践を進めたことが、このような翼の変容につながったのであろう。

## 6 教師のうちなる激情との葛藤を乗り越える

3学期に、こんなことがあった。6時間目が終わり、提出物を出して、帰りの会が始まるのを待つときに、翼が別の子に、面白いことを思い付き、それを伝えに行った。おもしろいことを言われた子どもは大声をあげて大爆笑をしていた。秦が注意すると、すぐにはやめずに面白いことを続けていった。さらに、秦は注意する。ようやく戻りだした。さっと一度の注意で聞かないことへの危機感を覚えた秦は、指導がこれから入らなくなっていくのではないのかという不安に駆られた。そのとたんに、怒鳴り声をあげて翼を叱りつけようという激情がわいてきた。幸い、翼はその後、自分の席に座ったので、秦が激情をぶつけることはなかった。

この場面について秦自身が考察したときに、これほどまで激情がわいたのには、それなりの理由が見つかったという。まずは、前日は、翼が休んでおり、隙間の時間にふざけるということがなかったため、やっぱり翼のせいで、このクラスは悪くなっているのだという感情である。もう一つは、教師の指示に一度ですぐに反応しなかったことへの焦りである。つまり、このまま続けば教師の言うことを聞かなくなってしまうという思考であった。こういった様々な要素が重なり、秦には激情がわいてきたのである。そして、それが翼への憎しみへと変わっていきかけていた。これはまさに自分の指導を拒否されたことへの不安であり、正しいことを分からせようとする指導である。学校的秩序にあまりにも捉われていた心境である。学校的秩序や学校的価値観がまん延している学校では、指導に従わない子どもへの激情がわくことに罪悪感を覚えない。「子どもが

言うことを聞かないので叱られて当然だ」「きまりや授業中は静かにしていることが絶対的なものである」ということに疑いをもたないであろう。しかし、こういった指導や方針が子どもを傷つけ、自己責任として学校から子どもを排除してしまうことになっている。

こういった子どもに大事なことは、このような分かれよう指導や自身の不安をぬぐいさるような指導ではなく、「子どもを分かろうとする指導」ではないであろうか。翼は面白いことを思い付いて、それを一刻も早く誰かに言いたかったのだろう、そして、最もうけて大声で笑ってくれる子に直接言った方が考えた甲斐もある。そこで、すぐに言いに行ったのだろう。翼が面白いことを言っている場面を見た時に、秦が、それをいったん受け止めて指導していたら、子どもの中におちた指導になっただろう。つまり、秦が二人を呼んで、「おもしろいことを思い付いて、一刻も早く仲の良い友だちに言いたい気持ちがあったんだね。それは、わかる。でも、今はどうするときだ？ いまではなくて、いつそれを言えば良かった？」というように、指導していたらどうだろう。翼は、自分のことをちゃんと受け止められたという感覚をもったのではないだろうか。それは、きっと安心感に似た感覚であっただろう。

## 7 まとめ

近年、すすきの頭部切断事件など、人々に大きな衝撃を与える事件が起こった。メディアは、“いびつな家族関係と猟奇的犯行”と報道し、その責任を家族の問題として扱っている。加害者は、中学校で不登校の経験を持っていた。しかし、学校は加害者が置かれている家族の中での生活現実から目をそらしてきて、そのまま放置してきたのではないだろうか。義務教育の間になんとか学校が、問題を抱える子どもや家族に寄りそって関わっていくことができたなら、このような事件までに発展しなかったのかもしれない。スタンダードによる指導によって、傷つき、切り捨てられた子どもや家族がいたことを私たちはもっと自覚するべきではないだろうか。

最も困難を抱えた子どもから学校や社会を見た時にどんな矛盾が見えるのか、そして、最も困難を抱えた子どもを軸にする指導は、学校的秩序を問い直す姿勢を教師に与えてくれる。まずは、そこに立つことが実践のスタートなのだ。最も困難を抱えた子どもを想定することで、社会や学校の矛盾を問い直すことができる。例を挙げると、担任するクラスに暴言や暴力を振るう子どもがいるとする。学校的秩序にとらわれた指導では、やめさせるという指導しか思いつかない。当然、そういった子どもは、やめさせるという指導に繰り返し傷ついてきた。そういった子どもは、暴力を振るってしまったにはわけがあるのに、そのわけをわかってくれない教師にあきらめや不信を抱いている場合が多い。そういった子どもに、「だめなことはやめましょう」や「人を傷つけることは絶対にはいけません」という指導をすることで、やっぱりこの先生も自分のことをわかってくれないと思うであろう。さらに、教師が強い圧をもって指導しようものなら、その子どもの中には、傷つきや絶望が残ってしまう。

もう一度繰り返すと、学校ではこうすべきという学校的秩序と闘うことが求められている。そのためには、学校的秩序を子どもと共に問い直し、それが子どもの成長や幸せを妨げるものであることに気づいていく。そして、そこから子どもたちを解放させ、抱えている生きづらさや願い、要求を聞き取っていく。そして、みんなで考え、それを取り組みにして、願いを実現させていく。そういったことを繰り返すことが、学校的秩序に取り込まれた学校空間に風穴を開けていくことになるのだ。そして、そこからさす光のもとで子どもたちは、共に助け合いながら幸せを追求していける集団になっていくのである。

高原実践の場合、勝手に帰ろうとしたカナに対して、学校的秩序に支配された教師なら、勝手に帰ろうとした行為のみを指導して、カナが帰らざるを得なかったしんどさに共感的に関わることはできない。しかし、上記のような指導をした高原は、カナにとって自立の手助けをする存在となっていた。

翼は、教師の言うことを聞かないといけないという学校的秩序から、はみ出して周りから排除され、さらに学校的秩序に戻そうとする学校の指導に傷ついてきた。秦は翼を最も大きな課題を抱えさせられた子と想定して、翼を軸に集団づくりをしてきた。

このように、スタンダードなどの新自由主義の政策の下に、教師の自由や専門性が奪われて、子ども分析に基づいた豊かな指導をする余裕や機会が奪われ、逆に画一的で規律だけを重んじる指導が増えている。この要因には、教師自身も孤独という不安に押しつぶされそうになりながら過ごしているためではないだろうか。今の教育情勢では、先のことを考えてしまう想像力がなくなってしまうたり、問題なく過ごすことが最優先で、さらに平和で楽しい学校をつくりだす能力を自分にはもっていないという無力感を感じさせられたりしてしまっている。そのために、教師の指導に子ども分析に基づいた活動の要素がなくなっていき、画一的で柔軟ではない活動や指導になっていってしまうのであろう。これから必要なことは、指導すべきことを分からせようということではなく、子どもが行動した動機やその時の気持ち、その行動の必要性を瞬時に読み取っていくことである。そういった意味では指導は技術であり、技術は磨かれて成熟していかなければならない。そのためには、学校的価値観を批判的に見て、「これでいいのだろうか？」と問い直していく必要がある。教師自身が自分の行った指導が、学校的価値観に囚われすぎていないか、子どもを無自覚に傷つけていないか、子どもの声に寄りそうことができていたのかを一つ一つ確認していかないとけない。それと同時に、学校そのものを変革していく、職場づくりの視点が必要になる。ここではそこまで掘り下げて提案することはできないが、同僚とどのように課題を共有していくのか、スタンダードによる指導をどう見直していったらいいのか、それらの点については、今後の課題としたい。

(文責：岩本訓典)

---

<sup>1</sup> 2024年6月7日～10日に実施された時事通信世論調査によると内閣支持率は16.4%となっている。<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA138A80T10C24A6000000/>最終閲覧 2024/6/14

<sup>2</sup> 京都教職員組合「市教組ニュース」、2023年5月

<sup>3</sup> 京都市教職員組合「第54回定期大会」、2023年5月

<sup>4</sup> 文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」、2023年10月 [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm) 最終閲覧 2024/6/14

<sup>5</sup> 高原夏希「カナの居場所をみんなで作るクラスを目指して」、京都府生活指導研究会編『Kの世界』113号、2024年1月

<sup>6</sup> 秦和範「イライラがおさまらない みんなで考える」、京都府生活指導研究会編『Kの世界』114号、2024年4月